

発 言 通 告 表 （ 一 般 質 問 ）

令和8年9月定例会

順位	氏名（議席）	発 言 の 要 旨
1	遠藤 盛正（22）	1. 富士川河口断層帯と地震防災について 静岡県では、今から約50年前の1978年に静岡県第1次地震被害想定が発表され、大規模な地震への備えが始まりました。当時の被害想定では、約6万9000世帯が全壊すると試算されていましたが、現在静岡県が示している第4次地震被害想定では、南海トラフ巨大地震が発生した場合、県内で最大30万4000棟が全壊するなど、より大きな被害が想定されています。 今回問題として取り上げた富士川河口断層帯は、静岡市、富士市、富士宮市の3市にまたがり、地震調査研究推進本部の長期評価では、駿河トラフで発生した海溝型地震に伴って活動したと考える場合、今後30年以内にマグニチュード8程度の地震が発生する確率は最大18%と評価されており、今年7月に熊本県で地震を引き起こした日奈久断層帯と同じSランクに位置づけられています。 富士市は東西に広く、富士川をはじめとする河川、山間部、住宅地、工業地帯など、地域ごとに特性が大きく異なることから、災害時に直面する課題も地域ごとに異なることが想定されます。一律的な防災対策のみでは、全ての市民の安全を確保することは困難であるため、地域ごとの被害想定を具体的に示し、行政のみならず、自治会、自主防災会、消防、医療、福祉、そして市民一人一人が、自らの地域で何が起こり得るかを共有しておくことが重要であると考え、以下質問いたします。 (1) 富士市として、富士川河口断層帯による地震に対し、現在どのような被害を想定しているのでしょうか。また、その想定に基づき、現在どのような防災・減災対策を講じているのでしょうか。 (2) 富士川河口断層帯が活動した場合を想定し、高齢者や障害者などの要配慮者への支援について、地域ごとに具体的な検討を行っているのでしょうか。

順位	氏名（議席）	発言の要旨
2	望月 徹（１１）	１．機能別消防団員の拡充により、防災強化を 火災のときや大規模災害時の初期対応から、地元消防団の活動に頼ることが多くあります。しかし、他市町と同様に、団員の高齢化、人手不足に歯止めがかからない状況が続いています。処遇面など国を挙げて取り組まなければならない点、市として日常の訓練や勤務内容について、より働きやすい体制・環境を構築していくなど、対策すべき点も多くあります。 本市は、平成31年４月より大規模地震など多種多様な災害に対応するため、消防吏員と消防団の退職者を対象にした機能別消防団員制度を導入しています。 本市消防団員数は、条例定数1030人に対し、令和８年８月１日現在、基本団員614人、機能別消防団員127人（うち広報担当団員３人含む。）の741人となっています。消防団組織の再編、働き方改革など人手不足への対策も進めています。他市事例からも、地方の自治体では、人手不足が進む中、いろいろな対策をされております。 消防団活動は、多種多様な活動があり、現在のＯＢ団員に限られた補充から、多種多様な状況に対応した、下記機能別消防団員を補充することで、防災力強化につながると考え、以下、質問いたします。 (1) 60歳から70歳までの男性の方で、消火活動、災害対策など基本団員を補完する人材を団員とする必要があると考えるが、当局の見解をお伺いします。 (2) 女性隊：上記と同じ活動で、地区内で仕事をしているなど、早急な対応ができる人材を団員とする必要があると考えるが、当局の見解をお伺いします。 (3) 音楽隊：本部所属として、市主催のイベントなどで活動する人材を団員とすることについて、当局の見解をお伺いします。 (4) ドローン隊：大規模災害時などに地区別に活動できる人材を団員とすることについて、当局の見解をお伺いします。 (5) 火災予防・広報・救護活動団員：住宅防火訪問・高齢者訪問や救命講習の実施を中心とした活動で、大規模災害時、避難所などでも即戦力として活動する人材を団員とすることについて、当局の見解をお伺いします。

順位	氏名（議席）	発言の要旨
3	関 明美（3）	1. 富士市観光PR大使「かぐや姫」の募集環境の改善と衣装の費用負担の公的支援について 富士市では、かぐや姫コンテストを長年にわたり実施し、選出されたかぐや姫クイーン及びかぐや姫の皆様には、本市の顔（富士市観光PR大使）として各種公式行事等で本市の魅力発信やイメージ向上に御尽力いただいている。 しかしながら、募集要領では、原則、振り袖での活動が基本とされ、その準備や維持管理費（購入・レンタル・手入れ等）は全て個人負担とされている。振り袖の着用・準備には数万円から数十万円規模の経済的負担が伴うのが現状であり、これが理由となって応募を断念せざるを得ない市民が存在することは、市民参加型の文化事業及び誰もが挑戦しやすい環境づくりの観点から大きな課題と捉えている。 富士市観光PR大使「かぐや姫」の活動は、個人の趣味趣向ではなく、市の公式PR活動であり、市が観光協会等へ補助金を交付して実施している事業である以上、応募者の経済的負担を放置することは、応募機会の不平等を生み出し、ひいては事業の持続可能性や質の確保を阻害する要因となり得る。 時代に即した持続可能な観光PR事業へと発展させ、多様な市民が応募しやすい環境を整えるため、市として当事者主体での見直しが必要と考え、以下伺う。 (1) 富士市観光PR大使「かぐや姫」の活動の位置づけと衣装の費用を個人負担としている現状への評価について ① 富士市観光PR大使「かぐや姫」の活動における市の役割と、衣装の費用を全額個人負担としている現状についての市の見解を伺う。 ② 高額な衣装の費用負担が応募機会の制限（参入障壁）になっているという認識はあるか伺う。 (2) 市の指定衣装・公式行事等における個人負担の現状について 市が関与する他の事業や富士市観光PR大使事業等において、指定の衣装の準備費用を個人負担としている事例があるか伺う。 (3) 個人負担を軽減するための仕組みを導入すべきと考えるが見解を伺う。 2. 富士市立中央病院の建て替え計画における浸水・地盤リスクの定量的評価と防災対策の徹底について 地域の災害拠点病院である中央病院の建て替えは、大地震や近年激甚化する豪雨災害時にも確実に医療機能を維持できる計画でなければならない。敷地のかさ上げや建物の免震化などのハード対策が検討されているものの、1000年に一度レベルの想定最大規模降雨時における周辺アクセス道路の浸水被害や、潤井川沿いという立地条件における地震・液状化リスクの定量的評価については市民から不安の声が上がっている。 事業着工を目前に控え、災害対策に万全を期す観点から、今一度、豪雨対策及び地盤リスクに関する具体的な数値を明確にし、実効性のある安全対策が必要であると考え、以下伺う。 (1) 想定最大規模降雨時における周辺道路の浸水・中央病院の孤立化リスクとアクセス対策について ① 敷地自体を約1.2メートルかさ上げする計画と承知しているが、想定最大規模降雨が発生した場合、中央病院に隣接する主要アクセス道路及び緊急搬送ルートにおいて、想定される最大の浸水深及び浸水が継続する

順位	氏名（議席）	発言の要旨
3	関 明美（3）	時間の試算数値はどのようなになっているか伺う。 ② 敷地内が無事であっても周辺道路の浸水により救急車の緊急搬送ルート、医療スタッフの参集及び医薬品等の搬入が遮断され病院が孤立化する恐れがある。緊急搬送ルートの整備状況や道路の高架化・かさ上げ等によるアクセス確保策について、市は具体的にどのような検証を行っているか伺う。 (2) 潤井川沿いの地盤調査データに基づく地震・液状化リスクの定量的示唆について ① 河川近接エリアには一般的に粘土層や砂質土が分布し地盤が増幅・液状化しやすいとされているが、実施したボーリング調査等に基づくN値（地盤の固さを示す指標）や液状化対象層の厚さ・危険度指数（P L 値等）の具体的な調査数値をどう把握しているか伺う。 ② 大地震発生時における周辺地盤の側方流動や地盤沈下が、建物の基礎くい・埋設配管（上下水道管・ガス管等のライフライン接続部）へ与える影響について、定量的なリスク予測値（地盤の水平移動量、不同沈下量、曲げモーメント・せん断力、許容変位量）とその補強対策を伺う。

順位	氏名（議席）	発言の要旨
4	植松 光徳（７）	1. 横断歩道橋の老朽化対策と持続可能な維持管理について 横断歩道橋は、通学や通勤、買い物など、市民の日常生活を支える身近な交通インフラであり、とりわけ交通量の多い道路において、歩行者の安全を確保する重要な役割を担っている。一方で、本市における多くの横断歩道橋は高度経済成長期などに整備され架設後50年以上が経過する老朽化施設が半数を超えており、今後、点検や補修、塗装、更新などに継続的な費用が必要となることが想定されている。市では、富士市横断歩道橋長寿命化修繕計画を策定し、予防保全型の維持管理や新技術の活用、施設の撤去・集約化によるコスト削減に取り組んでいるが、厳しい財政状況の中、継続的な管理コストの確保は容易ではない。 こうした中、全国では身近な公共インフラである横断歩道橋を対象としたネーミングライツの導入が広がっている。大型施設と比べて低額で導入できるため地域企業が参加しやすく、自治体にとっては維持管理における新たな財源確保、企業にとっては地域貢献やブランディングに寄与するという双方のメリットが存在する。 本市の貴重なインフラを安全に維持しつつ、持続可能な管理体制を築く観点から、本市の横断歩道橋の維持管理の現状と今後の考え方、そして新たな財源確保策について、以下質問する。 (1) 本市が管理する横断歩道橋における老朽化の進行状況と、今後の維持管理や安全性確保における具体的な課題について、市の認識を伺う。 (2) 横断歩道橋長寿命化修繕計画に基づくコスト削減策や施設の撤去・集約化の推進を含め、今後どのように横断歩道橋の効率的な修繕マネジメントを進めていくのか伺う。 (3) 横断歩道橋の維持管理における新たな財源確保と地域企業との連携強化の観点から、横断歩道橋へのネーミングライツ導入を進めるべきと考えるが市の見解を伺う。 2. 令和８年熊本地震及び令和８年８月千葉豪雨の教訓を踏まえた本市の災害医療体制について 大規模災害時には、多数の傷病者が発生し、医療需要が急増する一方、医療機関自体も停電、断水、通信障害、職員の参集困難などにより機能低下に陥るおそれがある。令和８年熊本地震や令和８年８月千葉豪雨での大規模停電・水害を見ても明らかなように、多くの医療機関が非常用電源の燃料切れや貯水槽の損壊・給水停止により、早期の診療停止・患者搬送を余儀なくされた。地域医療を守るためには、各医療機関のＢＣＰの実効性を高めるとともに、停電・断水時にも医療を止めないための非常用発電機や貯水槽等のインフラ整備が急務である。 本市においても、南海トラフ巨大地震や大規模水害等が想定される中、災害拠点病院である中央病院のみならず、救護病院に位置づけられる医療機関等が発災後も一定の医療機能を維持することが、市全体の災害医療体制を守る上で不可欠である。 そこで近年の実災害から得られた教訓と、富士市の災害医療体制確保の取組の進捗を踏まえ、本市の災害医療体制の実効性をさらに高める観点から、以下質問する。 (1) 令和８年熊本地震及び令和８年８月千葉豪雨の教訓を踏まえ、本市の災害医療体制について、どのような課題を認識し、今後どのように見直して

順位	氏名（議席）	発 言 の 要 旨
4	植松 光徳（7）	いく考えか伺う。 (2) 令和6年11月定例会の一般質問で取り上げた、災害対策本部への医療関係者配置や医療救護所の人材確保・訓練等について、その後の進捗状況はいかがか伺う。 (3) 救護病院となる医療機関等の災害対応力強化に向け、富士市としてどのような支援を考えているか伺う。